



内容を深く**追求**する
国語の授業づくり

追求の授業をつくる会
授業づくりセミナー 2024夏

今回のポイント

1

言葉に隠されたものを見つける「追求」の面白さを知る

2

言葉に着目し、言葉を探る大切さを知る

3

言葉の力を育てるための「追求の授業づくり」に挑戦する気持ちをもつ

全国学力調査⇒中学・国語の正答率が前年度から11ポイント低下し、過去最低となった。

文部科学省、SNSや動画視聴の時間については、中学校で少し増えてきている。ゲームや動画視聴などにとられる時間が多いほど、正答率が低い」とも伝えられた。

「失敗する人はキーワード読みである」 ⇒単語レベルでは理解しても、文章として理解できていない。

単語としてはほぼ同じものが使われているものの、その順番や助詞が違うことで、全く意味が異なっているのに、これに気づかない。助詞がどちらからどちらに行っているなど、構造を読む力がない。

情報の一部だけを切り取って、しかも正しく意味を取らずに受け取ってしまう。部分的に見て、勝手に自分で判断している、全体を見ていない。SNSなどから流れてくる情報量が多いため流し読みをする、部分的に読むというような自己流で読んでしまう。

その自己流の読みはなかなか治せない。それは『読み』は脳内で起こっているため、隣の人がどういう風に読んでいるか観察できないから。

Ameba times(8/2) より

特に強く印象に残った言葉と、そうでない言葉との間には、はっきりとした差があるだろう。記憶に残りやすいのは、自分にとって馴染みのある言葉や、自分が普段から関心を持っている言葉である。あるいは、トラウマになっている出来事に関する言葉を、「無意識」に拾ってしまうかもしれない。しかし、それらはいずれも、読者にとって重要な言葉であり、文脈上、作者が特に強調したかった言葉ではないのである。つまり、読者はそのとき、作者の言わんとするところを理解するのではなく、単に自分自身の心の中をそこに映し出しているに過ぎない。

平野啓一郎『本の読み方 ―スローリーディングの実践―』より

1 言葉の学習としての国語教育

「話す・
聞く」言葉

- ・日常生活の中で獲得する

どんな言葉（単語）も、ほとんど無意識に発音できる文法（動詞の形態変化、格助詞の使い方、等）も**無意識に使用できる**。

「読む」言葉

- ・学校の学習を通して獲得する

文章構造を意識しながら言葉の意味・使い方・ニュアンス等をあてはめていく。**意識しないと使用できない**。

「書く」言葉

- ・学校の学習を通して獲得する

必要な単語を選び、構文法にあてはめていく。表現の的確さも求められる。**意識しないと使用できない**。

壁

2 「話す・聞く」から「読む」へ、「読む」から「書く」へ

「みる」って
そういう使い
方か…



言葉を
自覚する段階

この書き方
にはドキッと
するな



「 」は、ど
うしても伝えたい
言葉だな

この言葉よりも、
こちらの言葉を使
ったほうが伝わり
やすいな

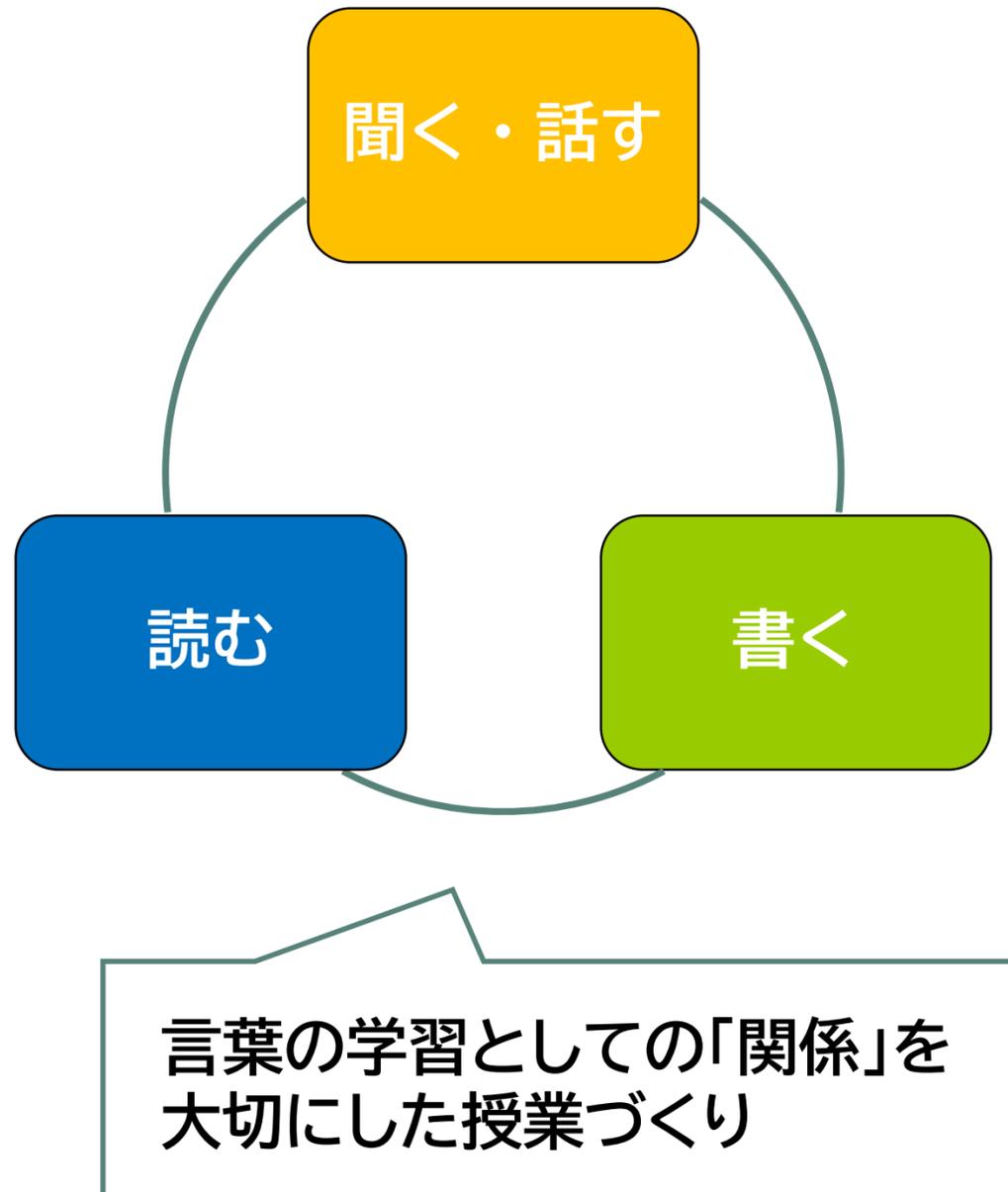
接続語を使った
方が分かりやす
くなるかな

この書き方よりも
ぴったりの書き方
はないかな



言葉を
自覚的に使う段階

3 言葉を関係の中で学ぶ



子どもは読みながら、頭の中ではいろいろなことをしゃべったり聞いたりしているのです。(中略)

ですから、「話し・聞き」という作業は、じつは「読む」という作業のなかに入ってきているのです。それを切り離してしまうと、「話し・聞き」も死んでしまおうし、「読む」ほうも死んでしまうのです。まして「書く」ことは、ひじょうな集中のエネルギーを必要としますから、書くという孤独な作業を通じて、たくさんの友だちのなかへ自分が橋を架けて、それによってみんなと対話をするところまでは、なかなかいかない。書くことを通じて、そういう喜びに満ちた世界に子どもたちが入り込むことは、ひじょうにむずかしい。「読む」「聞く」「話す」、そして「書く」という活動がぜんぶ連結しているという認識のうえにたって子どもに教えるべきだと思います。実際、書くという作業はそこまでいかないと、意味がないのです。

大岡信『日本語の豊かな使い手になるために』より

小説をつくり出す行為と、小説を読み取る行為とは、与える者と受け取るものとの関係にあるのではない。それらは人間の行為として、両者とも同じ方向を向いているものである。(中略) 言葉を文字に書きつける作業と、文字から言葉を読み取る作業とは、おなじ構造に属する活動である。

大江健三郎『小説の方法』より

文章の組み立てというものを講義するのもよくない。そんなことぐらい名文を熟読すれば自然に判ってくる。

丸谷才一『完本 日本語のために』より

4 言葉のモデル

子どもの言葉が育つ条件

- 〈乳幼児期〉 1 乳児期からたくさんの豊かな言葉を周囲の人からかけられること（聞くこと）
- 2 周囲の人の言葉をまねて発すること

モデル = 大人・保育者



〈児童期〉

モデル = 大人・教師・教科書

教科書教材をモデルとして…

言葉の意味・働き・使い方・言葉の関係性・言葉の力強さ、美しさ
・言葉の選択の見事さ・文体の明快さ・文章構成の面白さ…

などに触れ、学ぶことを繰り返す。 ⇒ 〈「読む」言葉の獲得〉



〈「書く」言葉の獲得〉

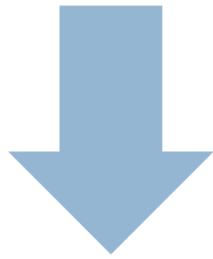


まずはここから！

5 「読む言葉」の効力

〈よくある読み〉

たぬきは、毘から助けてくれたおかみさんに、糸をつむぐことで恩返しをしたかった。その恩返しができる、うれしくてたまらない、となった。



イメージの
変換

〈言葉に着目した読み〉

たぬきは、おかみさんに気づかれないように、その目をぬすんで糸をつむいでいた。糸を束ねて積むのに夢中になっていて、おかみさんがのぞいているのに気づかなかった。おかみさんに気づいてそとに飛び降りた。

でも自分が思った通り（おかみさんのまね）に糸をつむぐことができ、非常に満足して、うれしくてたまらなくなった。

はるになつて、また、きもりのふうふは、山おくのこやにもどつてきました。

とをあけたとき、おかみさんはあつとおどろきました。いたの間に、白い糸のたばが、山のようにつんであったのです。そのうえ、ほごりだらけのはずの糸車にはまきかけた糸までかかっています。

「はあて、ふしぎな。どうしたこつちや。」

おかみさんは、そうおもいながら、土間でうはんをたきはじめました。すると、

キーカラカラ キーカラカラ
キークルクル キークルクル
と、糸車のまわる音が、きこえてきました。

びっくりしてふりむくと、いたどのかげから、ちやいろのしっぽがちらりと見えました。

そつとのぞくと、いつかのたぬきが、じょうずな手つきで、糸をつむいでいるのでした。

たぬきは、つむぎおわると、こんどは、いつもおかみさんがしていたとおり、たばねてわきにつみかさねました。

たぬきは、ふいに、おかみさんが、のぞいているのに気がつきました。

たぬきは、びよこんとそとに飛び下りました。そして、うれしくてたまらないというように、びよんぴよんおどりながらかえつていきましたとさ。

『たぬきの糸車』(一年)より

5 「読む言葉」の効力



1 東君と西君は、とっても仲が悪い。好きなものが正反対で、いつもたいこう心をもやしている。

2 東君は、サッカーが好き。西君は、読書が好き。国語が好きな西君、算数好きの東君。「ねこが最高。」と言う東君に、「犬が一番。」と言う西君。好きな色は、西君が赤で、東君が青。

3 そうじの時間、二人は新しいほうきを取

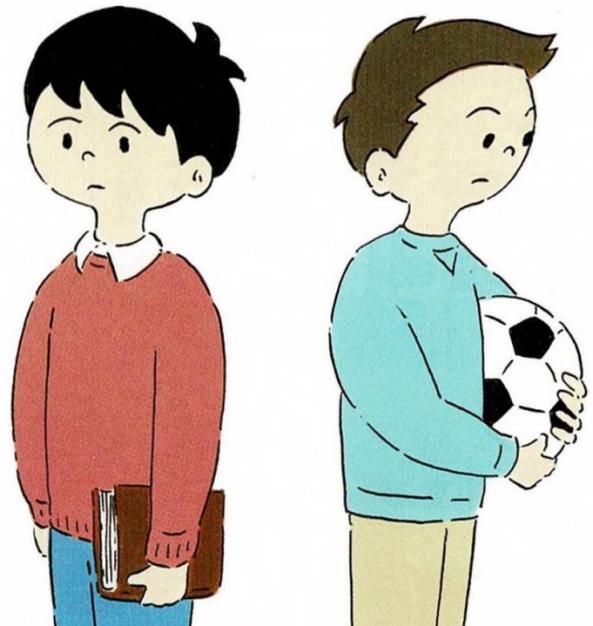
り合う。給食のときは、のこったプリンを取り合う。いつだって、何かを取り合っただけだ。ほうきやプリンが好きなんじゃない。相手に取られるのがいやなだけだ。その結果、大さわぎが始まる。そして、たん^{なか}にんの中井先生にしかられる。

4 学級会は、二人の言い合いでまとまらない。それぞれ、相手の意見に反対ばかりするからだ。

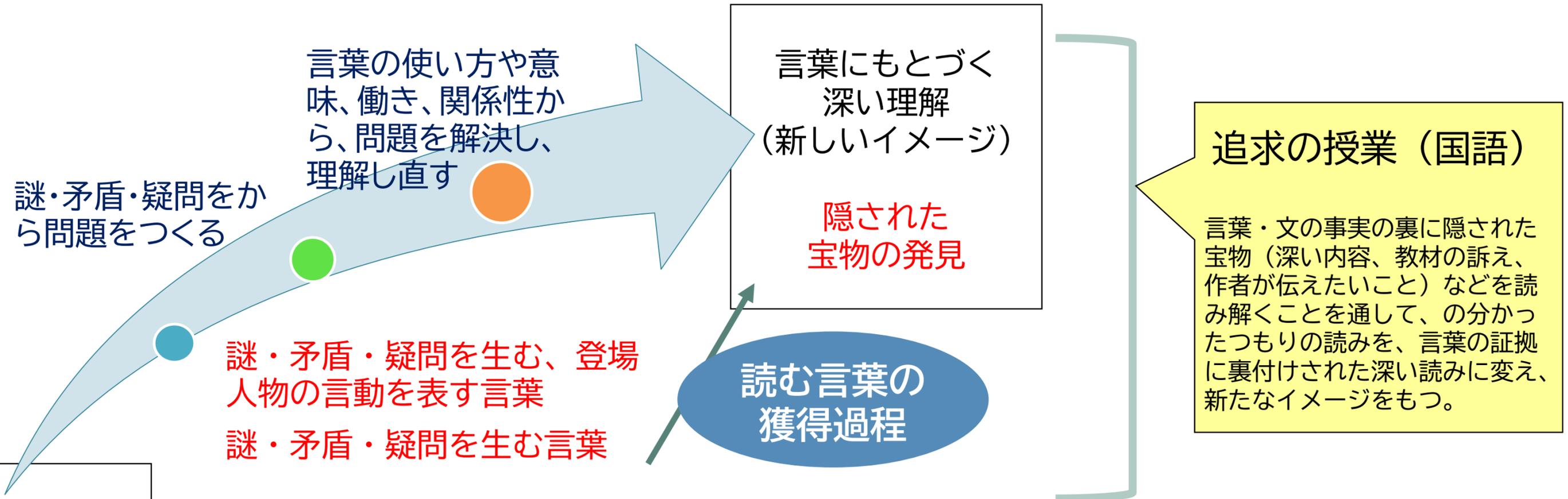
5 そんな二人に、クラスのみんなは、あきれたり、「ライバルだから。」とおうえんしたりしている。

6 ぼくは、あまり気にしていない。ぼくは、クラスでは目立たないほうだ。ただ、みんなとちがうところがある。気になったことがあると、答えが出るまで考え続けてしまうんだ。そして、必ず答えたどり着く。そんなぼくに、母さんは言う。「どれだけ時間をかけて考えてもいいのなら、いつもテストはいい点なのにね。」って。

『友情のかべ新聞』(五年)より



6 「読む言葉」へ着目するきっかけ



分かっている
つもりの理解
(最初のイメージ)

謎・矛盾・疑問を生む、登場人物の言動を表す言葉
謎・矛盾・疑問を生む言葉

言葉の使い方や意味、働き、関係性から、問題を解決し、理解し直す

謎・矛盾・疑問をから問題をつくる

言葉にもとづく
深い理解
(新しいイメージ)

隠された
宝物の発見

読む言葉の
獲得過程

追求の授業 (国語)

言葉・文の事実の裏に隠された宝物 (深い内容、教材の訴え、作者が伝えたいこと) などを読み解くことを通して、の分かったつもりを読み、言葉の証拠に裏付けされた深い読みに変え、新たなイメージをもつ。

「すぐれた小説家は、最も大切な宝物をみすみす見えるところに置いたりはしない、隠すのだ」「小説家はどのようにして宝物を埋め込むのだろうか。その一つの方法は、肝心な事柄を省略して書かないことである。」「言葉の隙間こそが重要な働きをしている」「小説の重点は因果関係(プロット)に置かれており、『なぜか』という問いを満足させるために書かれたもの」
(石原千秋 『未来形の読書術』)

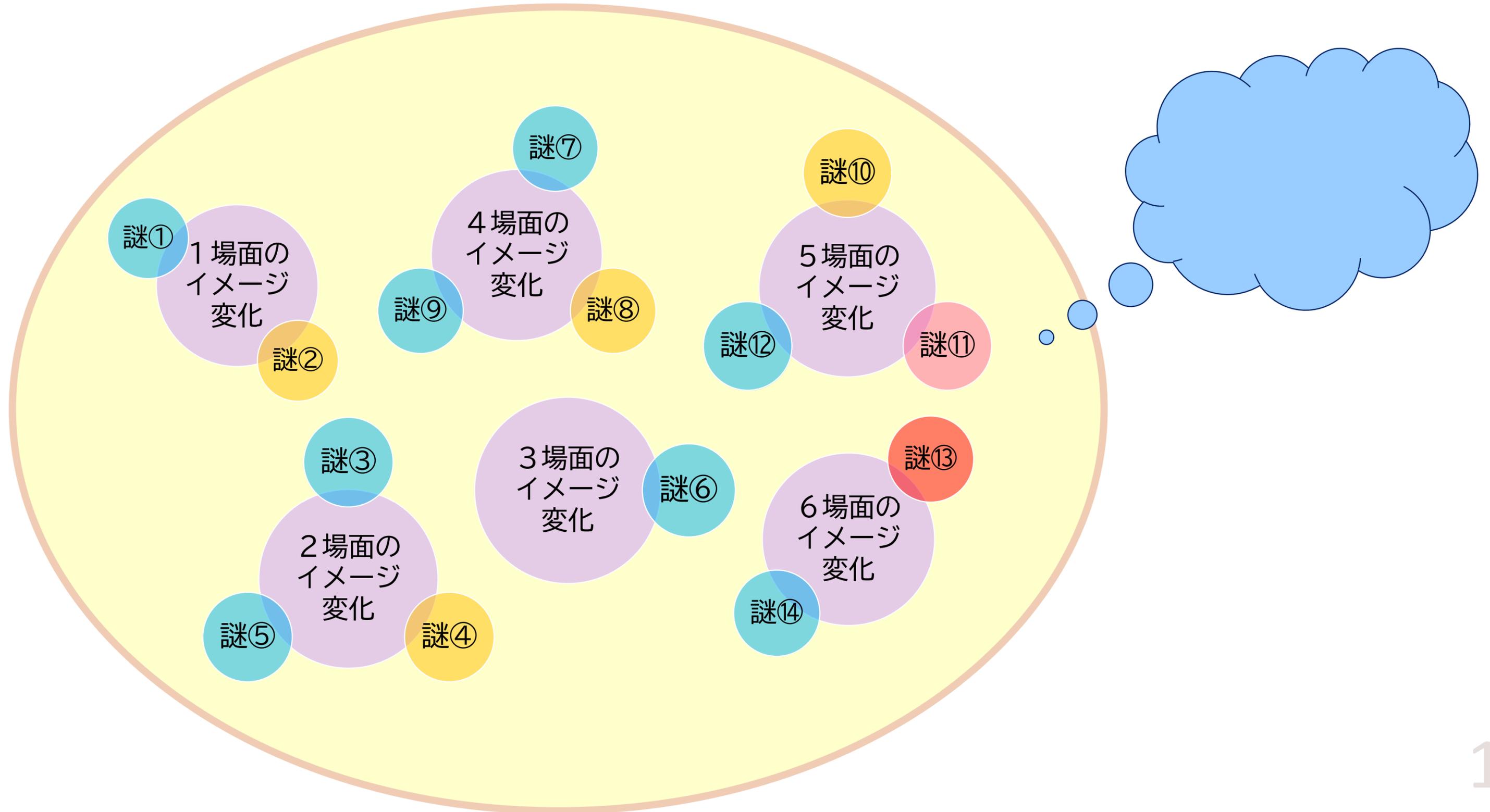
「とにかく、大切なのは、立ち止まって、『どうして?』と考えることだ」「会話の中で、聴く気のない相手に対して、人が『この人に話しかけてもしかたない』とそっぽを向いてしまうように、『なぜ?』という疑問を持たない人には、本は永遠に口を閉ざしてしまおうだろう」
(平野啓一郎 『本の読み方—スローリーディングの実践—』)

演習

『みきのたからもの』 はちかい みみ
(光村図書 2年下)



10 新しいイメージをもつ（隠された宝物の発見）



11 まとめ① 学習における問題の重要性

謎を育てる

「良い問」の条件の第一は、それが**自分の発した謎**だということです。他人が発した謎、でき合いの謎では切実に迫ってこない。仮にでき合いだと謎だとしても、**自分が痛切に「おや、おかしいぞ、不思議だぞ」と思ったとき、それは良い問になる**わけですね。

二番目に大切なのは、謎をいかにうまく育てるかということです。どんな謎でも、最初は「不思議だなあ」といった漠然としたものにすぎない。それを**上手に「良い問」に孵化してやる**ことが大切です。

(中略)

一番大切なのは、謎を自分の心に銘記して、常になぜだろう、どうしてだろうと思いつける。思いつけて**謎を明確化、意識化する**ことです。そのためには、**自分の中に他者を作って、そのもう一人の自分に謎を突きつけて行く必要があります**。

丸谷才一『思考のレッスン』より

言葉、言葉と言葉の関係に謎・矛盾・疑問を見つける

- (登場人物は) なぜ、このようなことをするのか？ (…ように書かれているの?)
- (登場人物は) なぜ、こうしないの？ (…ように書かれているの?)
- (登場人物は) なぜ、こんなことを言うの？ (…ように書かれているの?)
- (登場人物は) なぜ、こんな言い方をするのか？ (…ように書かれているの?)
- なぜ、無くてもいいのに、わざわざこの言葉を使っているの？
- なぜ、他の言葉でもいいのにわざわざこの言葉を使っているの？
- なぜ、あえてこの言葉を書いていないの？
- 「こ・そ・あ・ど」言葉の示しているものは何？
- なぜ、〈逆接の接続語、助詞、助動詞、副詞、形容詞など〉を使っているの？
- なぜ、わざわざ「」として発話・会話にしてあるの？
- なぜ、倒置や繰り返し、強調などを使っているの？
- なぜ、同じ内容なのに違う書き方に変えてあるの？

等

子どもにとって、切実感のある謎・矛盾・疑問（問題）が存在することが、学習の必然性を生む
〈追求の動機〉

12 まとめ② 追求の授業への挑戦

前提：教材解釈

隠された内容を追求する段階

表面上見える
ものを読む

疑問・矛盾・
謎をもつ
(問題づくり)

考えをもち、
考えの違い
に出会う

言葉を証拠
に問題を解
決する

新しいイメー
ジをもち、宝
物を見つける

読んで、大体の内容
をつかむ段階

追求の動機①
教材の表現・内容
について「謎を育て
る」

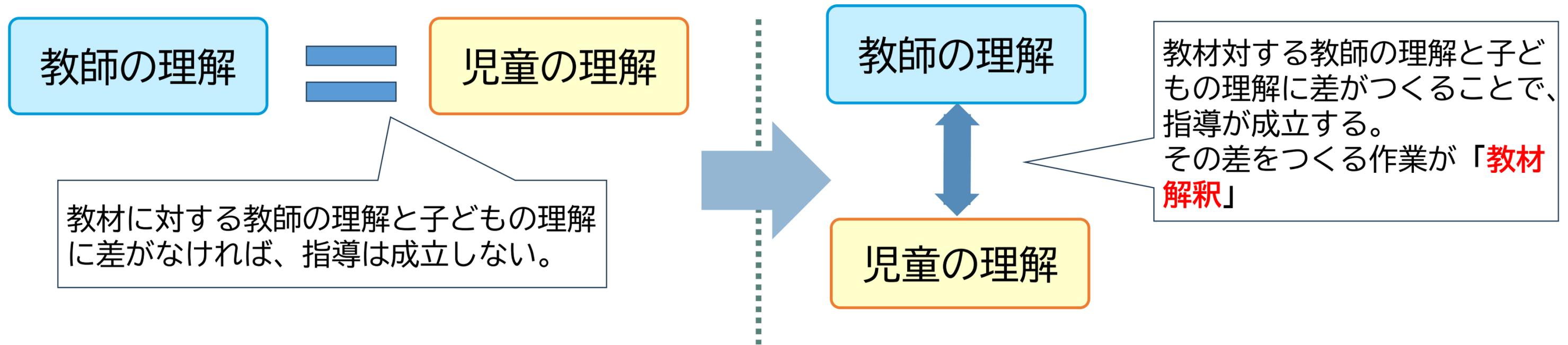
追求の動機②
自分の考えと友だ
ちの考えの違いに
ついて「謎を育て
る」

論証・対話
言葉を証拠に挙
げながら、論理的に
解決に向かう

イメージの転換
最初のイメージが
新しいイメージに変
わり、教材の価値に
触れる

主体性・対話性

13 まとめ③ 子どもの理解との差をつくること（教材解釈）の重要性



教師が、教材をみ、教材を解釈する場合は、子どもをみる場合と同じに、まず、いっさいの先入観とか既成の概念的な知識とかを捨て、そこに表現されている教材の事実にしたがって考え、自分の解釈とかイメージをつくり出すという態度が必要である。それは対象の事実にしたがって、自分の目でとらえるという努力をしていくことであり、教材の中から少しでも多くの自分の発見をし、自分の解釈をつくり出していくということである。

教師が教材に対して自分の解釈を持ち、課題や問題を持ち、それらのなかからつくり出した自分のイメージを持っていれば、授業はすでに展開し成立したと云っても云いすぎではない。それは教師が、そういうものを自分のなかに強くもっていればいるほど、その問題を子どもの問題とし、子どもと一緒に追求してみたい気持ちにかられるからである。そのために、あらゆる努力を惜しまずに問題を子どもにぶっつけていくようになるからである。